

明倫館だより

第47号
平成19年4月1日発行
発行人 井上晴雄
財団法人 南豫奨学会
南豫明倫館
〒184-8586
小金井市中町 4-18-26
TEL 042-383-9835(代)

故郷の
地震の便り
水申花
岡本 光平
七夕や
遠くに次の
駅が見え
谷 雄介
明倫館俳句会

新時代を求め 九人が卒寮



卒寮生氏名(大学名・出身地)進路
一、将来の抱負 二、後輩への助言

- 岡本 光平**(電気通信大学・電気通信学部、松野町)
電気通信大学大学院
現在、医療機器・介護機器方面への就職を考えています。僕が関わった物が地元で使用されれば何よりです。
様々な大学・学部の大学生や、様々な職業の人たちと接しましょう。そうすることで人間性が豊かになると僕は信じています。
- 友澤 孝規**(東京大学・工学部、松山市)
東京大学大学院
世界最高峰の学者になりたいと考えています。専攻が技術経営で主に企業価値を

扱うので技術ベンチャー投資も行っていきたいです。
二 大志を描いてください。大志を描き、その大志に向かって進めば自分も世界もよいもの変わってくるはずだと思います。

西田 幸平(中央大学・商学部、宇和島市)
トヨタL&F西四国株式会社

- 一 地元愛媛の物流の一端を担う者として、愛媛県の物流を支え、地域活性化に少しでも役に立てるようにしたいと思います。
二 趣味でも何でも良いので、好きなことを見つけ、それを支えにさまざまなことにチャレンジしていきましょう。

松本 愛則(国学院大学・文学部、松野町)
未定

- 一 自分の決めた生き方は、最後まで裏切ることがないよう頑張っていこうと思います。
二 思いがけない病気にかかり、時間を奪われることがないよう、普段から健康管理に気を遣いましょう。

渡辺 徹(拓殖大学・政経学部、宇和島市)
株式会社パラス

- 一 私の人生の大目標は明るく元気に楽しく生きることです。それに向かい型にはまらず自分らしく努力していきます。
二 運動しましょう。いいことあるから。

松浦 良(電気通信大学・電気通信学部、吉田町)
東京大学大学院

- 一 音響・音声に関わる研究をもっと深めていくことはもちろんだが、研究を通して自己を研鑽し、魅力ある人間になりたいと思っています。大学というところは、知識を吸収する場というよりも、吸収する方法を学ぶ場であり、また友人(人脈)を作る場であると思います。勉強だけにとらわれず、いろんなことにチャレンジして下さい。もちろん勉強も大事ですが。

永見 賢(早稲田大学・法学部、松山市)
三井住友海上

- 一 早く社会人生活に慣れ、保険を通して会社に貢献できるよう努力する。
二 四年間という短い大学生活を有意義に過ごして下さい。自動車を買ったら保険はぜ

ひ我が社へ。

宮住 達朗(法政大学・経済学部、松山市)
伊予銀行

- 一 常に広い視点から物事を見極めて行動できる人物になりたい。常に自らの可能性を最大限に引き出したい。
二 一度しかない人生です。自分の置かれている状況に甘えるのではなく、どんどん新たな世界を開拓して充実した毎日を送って下さい。

中山 文記(東京大学・経済学部、愛南町)
みずほ銀行

- 一 金融機関で高いスキルを身に付け、そのスキルをバックに海外を拠点にして世界経済に貢献していきたい。
二 明確な目標と強い意志があれば大抵の事は達成できるのではないのでしょうか。頑張ってください。

伝統の継承を

自治委員長 松下 祐樹
中央大学(商)三年

今期委員長を努めさせて頂く中で私が目標に掲げた事は、この南豫明倫館という素晴らしい環境と伝統を後輩たちに継承させるという事です。
今、この明倫館は日々の生活においての相手に対しての思いやり、寮としての一体感が少々欠けていると考え、二年生や一年生に対して意識改革のための話し合いを行いました。その結果として明倫館の一員である事がどういふことが自覚をしっかりとってくれた者も大勢いたと思います。これからも任期終了まで他の委員と共にこの寮のよき伝統を伝えていきたいと考えています。

平成18年度 下期自治委員会	
▷委員長	松下 祐樹
▷副委員長	二宮 佳久
▷企画	中野 敏彦
▷風紀	上田 陽平
▷整備	清水 信策
▷会計	久保 文亨
▷情報	松下 祐樹
▷広報	山家 遼
	山家 遼
	井上 拓哉

財団法人南豫奨学会

「奨学金支援会」だより

平成一八年度「南豫奨学会・奨学金支援会」結果報告、並びに一九年度分について募集を継続中

平成十八年度「奨学金支援会」の募金結果がまとまりましたので、ご報告致します。

平成十八年度の募金総額は左記集計表の通り総額二百一十八万円に達しました(表1参照)これは平成十七年度の三百四十三万円を下回るものでしたが、関係各位の皆様のご厚いご支援の賜物と感謝致しております。この結果、平成十五年度に奨学金支援会発足以来、合計八百六十四万円余の募金をいただき、現在四名の奨学金として活用させていただいております。

引き続き皆様には平成十九年三月三十一日現在で百四十万円のお振り込みをいただいております。(表2参照)本年度も総額三百万円を目標と致します。皆様のかかわらぬご尽力を伏してお願ひ申し上げます。

財団法人南豫奨学会・奨学金支援会
理事長・会長 伊達 宗禮

平成十九年四月二十五日

お振込みは左記の郵便振込番号か銀行口座で受け付けております。

郵便振込番号 〇二五〇一二一九六五三

名義 「南豫奨学会奨学金支援会」

銀行口座 伊予銀行新宿支店普通預金口座

名義 「財団法人南豫奨学会奨学金支援会」

委員長 松本 三郎

(表1) 平成18年度支援会申込者数並びに募金結果 (平成19年3月31日現在)

	申込者数(人)	募金額(円)
理事・監事他	14	400,000
評議員	34	700,000
OB	38	515,000
現父兄	15	170,000
一般	22	250,000
法人	4	200,000
市町村	1	50,000
合計	128	2,285,000

(表2) 平成19年度支援会申込者数並びに入金状況 (平成19年3月31日現在)

	申込者数(人)	募金額(円)
理事・監事他	9	280,000
評議員	20	370,000
OB	23	360,000
現父兄	7	70,000
一般	16	230,000
法人	2	90,000
市町村	0	0
合計	77	1,400,000

※一般には元父兄含まず。

ウルドゥー語劇団(下)

谷脇 慎太郎
東京外国語大学四年

「外大生、もとい大学生の手で行う『発信』。そこで新たな国際交流の形を提示しよう。」

ウルドゥー語専攻、麻田教授のひよんな提案から始まったウルドゥー語劇の海外公演。生きた言語の習得はもちろん、国際社会では日本人の顔が見えてこないといわれる中で、日本人の学生が何を学び、何を表現しうるのか。さらには、だしの「ゲン」を現地語で演じることで、敗戦後の貧困から復興への歩みを支えた日本人のメンタリティーを提示することが目標だった。かつては日本も、今日のインド・パキスタンと同じような状況にあったことを知ってもらえれば、草の根レベルで大きな意味があると考えたからだ。

二〇〇五年三月から約半年の準備を終え八月二十八日、いざインドへと発った。まず生まれて初めて感じるインド人と気候両方の熱気、そして異国の集団に向けて容赦なく注がれる視線は半ば、妙な高揚を伴った。八月二十日はいよいよ古都ラクナウにて初公演。案内された会場に着いて唖然とした。鍵を持っているはずの劇場の主が約束の時間から三十分待っても到着しない。雨季を終えて夏から冬へと季節が移ろう時期ではあるが、三十五℃を超える気温に汗は止まらない。しかしながら乾期となると湿度はほとんどなく、たまに吹く風が非常に心地よかった。

一時間ほど待った後、ようやく主が到着。会場の仕込みに入った。ここからは舞台上の位置取り、音響、照明の調整で現地人とのやりとりが始まる。これが劇本編に勝るとも劣らない体力勝負だった。現地スタッフに照明の要望を伝えると、彼らはその要望にこたえるのではなく、「いや、この照明もつと大きくていいんじゃない?」と新たな提案をしてくるのだ。そして役者のための控え室もまたカルチャーショックだった。第一印象は動物園の屋内の檻。ゾウの檻から出入り口でつながっているあれだ。そして猛烈な消毒液臭が立ち込める。きつと日本人が来るからと念入りに掃除させてしまったのだろう。彼らは何にしても加減が大味だ。

肝心の舞台は広く古い木造で、ところどころトゲや劣化が目立つ。しかしこのあとの旅で何よりも重要なのは見た目の綺麗さよりも、使えるかどうかだった。僕たちがその「使用可能」な舞台上に必要なマーケティングを施し、音響のポリウムを一曲一曲チェックする間、観客席にはどこの誰

かわからないインド人が自由に出入りし、歓談していた。

そんな中で迎えた初公演は、気温や照明の熱に朦朧としていたため本番中のことはあまり覚えていない。しかしエンドロールの灯籠流しのシーンが終わり、全員が舞台上に整列、正座したままお辞儀をし、本編を終え再び会場の明かりが灯ると舞台前、そして舞台上にもこの劇を見てどうしても感想を伝えたいという人たちが溢れかえった。特に印象に残っているのは「過去を繰り返してはならない。この美しい世界に、平和で輝かしい未来を築かなくてはならない」「一生懸命に生きるゲンの姿を見て、どんなことにもめげずに立ち向かう勇気を学んだ」という感想だった。発表する側としてこれほど嬉しいものはない。劇の途中、やけどや被爆後の急性症状に苦しむ人たちの姿をスライドで映し出すシーンでは、会場から驚きの声や漏れた「以前から『ヒロシマ』のことを聞いてはいたけれど、劇を見るまで詳しく知らなかった」という感想が多かったのは意外だった。

一連の写真撮影やサイン攻めを受け、インド人つてやっぱり何でもアグレッシブだなーと感心している。今度は報道用のカメラに公演後の感想を頼まれた。この学生演劇に国内の報道機関が反応して、観に来てくれた。この瞬間、なんだかとんでもない企画に参加している気がして内心ウハウハだった。翌日の新聞にはカラーで劇の断片を残した写真と、観客の感想と共に僕らのインタビュー記事が載っていた。同時にインドと日本での関心の違いはどこから来るのかが気になった。

この後は九月一日から二十四日にかけて、チャンディーガル・モハラー・シムラー・デリー・アリアーガル・パール・ムンバイ・バンガロール・ハイダラーバード、と合計十都市にて十一公演を行う過密スケジュールだった。なかでも劇の途中に緞帳が閉まったり、停電などのハプニングもあったが、なんとか気合と団結力で切り抜けた。

案の定、体調の方はというと入国一週間を過ぎたあたりから腹を下し始めた。クーラーが贅沢品であるこの国ではなにもつけてもクーラーを強めにつけたがる。おかげで一等寝台列車での移動

動では団員の半分以上が、いつ切れるかわからない緊張を腹に抱え込んでしまった。おかげで帰国後はみんな体重計に乗って喜んでくれた。

すべての公演を終え、C D・D V Dや民族衣装の買い物や済ませ、ついに帰国便を待ちに空港へ。まず国際便のルールで出発の三時間前には空港に到着したが、一向に搭乗案内が流れない。飛行機が遅れるのはこの国ではいつものこと、と教授も高をくくっていたが、六時間、待てども飛行機には乗れず。これはどうしたとやらオーバーブッキングが問題らしい。このままさらに数時間待つと、ホテルへ案内された。そんなこんなで帰国のフライトは一日遅れ、最後まで退屈させられない incredible India! 巡業公演の旅だった。



▲インド公演

アメリカ一ヶ月一人旅

アメリカに向かう前日、不精な性格のため旅の荷造りもろくに行っていない。僕は、大急ぎで必要な物を揃えたが、不安と緊張で一睡もすることが出来なかった。

自分が一ヶ月の間一人旅することを決めた理由、周囲へは「金髪の彼女を作るため」と言っていたが、本心ではこれから自分の向かう方向性、将来への不安に対し二人でじっくり考える時間を確保するため、また人一倍強い好奇心を満たすためであった。

出発直前の羽田空港、小さな書店で偶然目付いた「地球の歩き方」という本を購入する。他にもガイドブック的な物は持っていたのだが、このシリーズは海外旅行者にとつての必須アイテムらしく、後に僕の命の恩人とも言っているほどの大活躍をしてくれる。

最初の街、オレゴン州のポートランドという自然と経済の共存する街に到着。レンガの建物、All Englishの世界、金髪の美女などすべてに感動していたのも束の間、早速問題が発生。宿泊予定だったホテルのベッドが空いていない、日本への連絡が取れない、アメリカの親戚へも電話が繋がらないという事態に見舞われる。孤独と不安で軽いパニックになってしまった僕は、何を思ったか日本領事館へと向かった。しかし、領事館でも職員は不在。いきなり野宿かというピンチに、「地球の歩き方アメリカ編」が僕を街外れの小さなホテルへと向かわせたのだ。街のガイドブック

にも載っていないホテル情報によってなんとか野宿は避けられた。その後も「地球の歩き方」によりアメリカ中の格安ホテル、ユースホステルを渡り歩き、低予算で野宿することなく寝泊りすることが出来た。最後の日を除いて。

移動は「AMTRAK」という国内を網羅するマンモス列車を活用した。車両には食堂車、寝台車、展望車などがあり、二三日車内で過ごしても乗客との会話や食事を楽しむことができるので飽きることはない。その中でも僕の特にお気に入りなのが展望車。展望車は天井までガラス張りになっていて椅子は外向きの面白い構造。ロッキー山脈の間やデスバレー付近の絶景を当たり前のように入っていく。夜は東京では見られない満天の星空をガラス越しに楽しんだ。いろんな乗客と仲良くなり、アドレスを交換したり、一緒に食事をとったり、女性との付き合い方を真剣に教えてくれた老人もいた。また、元メジャーリーガーとも席が隣になって、現役時代はジャイアンツで2年間プレイしていたらしくサインを買った後は世間話を楽しく話して楽しかった。チケットは三十Daysレールパスという日本という青春十八切符の様なものを買って、ポートランドをスタートした後サンフランシスコ、ロサンゼルス、ラスベガス、グランドキャニオン、シカゴ、ワシントンDC、ニューヨーク、ポートランドというコースで大陸を往復した。日本とは違い列車は定刻通りに着くことはない。しかし、乗客は「こんな当たり前だよ」と言っていてアメリカ人の時間に対する感覚の違いに驚かされた。

宿泊は主にユースホステルという格安で泊まれる共有ホテル的なものを利用した。部屋は二段ベッド、ロッカー、シャワールームという簡単な作りで世界各國の若者が訪れる。名前はユースだが老人も宿泊可能である。そこではアメリカ以外すべての大陸の人と個室になり、友達になった。サンフランシスコのホステルではオーストラリアから来た十五歳の男子と夜中まで自国で日本語を勉強していたことや、旅の中で見たものや感じたことを話した。日本へのイメージはファッションや文化がクールらしく、思いのほか関心が高いようだ。ニューヨークではドイツ人とスペイン人のグループに混ざってもらい自由の女神やタイムズスクエア

を見て回った。スペイン人の一人は見た目も話方も動きもコメディアンの様人だったので普段何をしているのか聞いてみると、ドイツの大学で政治学を勉強していて、TOEFLのCBTスコアが三百点中二百八十点の秀才。さらにガールフレンドはドイツ人。つまり三ヶ国語をほぼ完璧に使いこなすトライリンガルだったのだ。英語のレベルはみんな同じくらいあるらしく、自分の力の無さに失望してしまっただけ。しかし、英語もカタコトの僕に対し彼らはゆつくり、分かりやすく、楽しく喋ってくれた。非常に親切な人達だった。彼らとは四日間しか一緒にいなかったが最後は泣くほど別れを惜しんでくれた。外国語へのモチベーションがメラメラと燃えているのを感じ、同時に彼らの優しさに触れて、自分の小ささを知った瞬間だった。涙はシカゴまで止まらなかった。

長かったアメリカ旅行の最終日、事件は突然起きたのだ。最後ということもあって翌朝の便を逃さないために前日から空港のロビーで初野宿を決行した矢先だった。枕にしていたPCが盗まれたのである。アメリカでも比較的治安のいいポートランド空港にいたこと、最終日の気の緩みが重なりPCは帰らぬ物になってしまった。日本と同じ感覚で生きていけないことを痛感させられた。学校でもバイトでもパソコンを毎日使う僕にはとても苦い経験となった。

寮生の皆さんも自分に何か大きな変化が欲しいと思ったとき、単身で海外に行くのはどうだろうか。僕は今回の旅行で幸運にも一生忘れられない出来事に出会い、経験をすることが出来た。旅の本来の目的にも自分なりの答えを導くことが出来たと思う。一ヶ月前と今を比べると今は何に對しても前向きに考えられるようになった。考え方や視野の拡大、語学の勉強など何か目的を持っていくとかなり有意義な時間を過ごせると思う。そのときは海外旅行の必須アイテム「地球の歩き方」の持参を忘れないように。もしかしたら金髪の彼女もGETできるかも。

▼十八年度は九人の卒業生がありました。進路は様々ですが、東京大学工学部友澤孝規君は首席で卒業。山中哲雄君(杏林大学・医学部)は六年間在寮、国家試験にも合格。どちらも明倫館の歴史に残る快挙です。

▼就職シーズン真っ盛り。超氷河期から一転超売り手市場などと呼ばれておりますが、うかれることなく堅実に進路を決めてほしいものです。

▼「奨学金支援会」に対する引き続きのご支援、誠にありがとうございます。



▲自由の女神のあるリバティ島に向かう船上

編集後記

▼十八年度は九人の卒業生がありました。進路は様々ですが、東京大学工学部友澤孝規君は首席で卒業。山中哲雄君(杏林大学・医学部)は六年間在寮、国家試験にも合格。どちらも明倫館の歴史に残る快挙です。

▼就職シーズン真っ盛り。超氷河期から一転超売り手市場などと呼ばれておりますが、うかれることなく堅実に進路を決めてほしいものです。

▼「奨学金支援会」に対する引き続きのご支援、誠にありがとうございます。